

「非毛沢東化」への 追隨か 失脚か

中 嶋 嶺 雄

まだ固まらない

華国鋒体制

北京政変以来、はや一ヵ月が過ぎた。

衝撃的なニュースが相次ぐなかで、中国の権力中枢における角逐の軌跡が、次第に明確な輪郭を形成してきた。しかし、いわゆる華国鋒体制の構築はいまだ完成していない模様である。

このことは、党中央委員会さらには党大会のような制度的保証によって華国鋒指導部がエンドース(承認)されてはいないらしいことによってもほぼ明らかであるばかりか、今回の「四人組」失墜によって、ついに華国鋒主席と葉劍英副主席の二人だけになってしまった最高権力機関つまり党中央政治局常務委員会(一九七三年夏の十全大会体制発足当時は九名)の人事的空白も埋められていないらしいことによっても判定できよう。

壁新聞が伝えた、李先念副総理の総理(國務院)就任、葉劍英副主席の党中央軍事委員会主席就任あるいはまた陳錫聯党

中央政治局委員(北京軍区司令)の国防部長就任という新しい人事についても、その可能性が十分に推察できるとはいえず、いまだ公式に確認されたわけではない。

このように未確定な要素が多いなかで、「四人組」の「罪状」が次々にあばかれて、まさにこれら「四人組」がかつて劉少奇らの実権派や陳伯達、林彪らの「陰謀家」に対して行なってきたのと同様、一方的に「四人組」が糾弾され、血祭りにあげられているかの感がある。これら「四人組」が江青夫人を中心に毛沢東家長体制の中核をなしてきただけに、その手法は、これら「四人組」を亡き毛沢東の威信から公的に、私的にも切り離し、毛沢東自身が「四人組」を認知していなかったという筋書きを形成する点においてきわだっている。

しかし、もしも「四人組」がそのように悪辣であり、毛沢東自身も困り果てていたのなら、なぜ、もっと早くに処断しなかったのだらうかという常識的な懷疑を打ち消すことは容易ではなからう。それだけに他方では、華国鋒新主席のイメージ形成が急がなければならない。

華国鋒主席は、江青らよりもむしろ「毛王朝」の正系といえそう。それだけに「非毛沢東化」の潮流にうまく対応できるかどうか。失敗すれば失脚が待っているのだ。

もっとも、私がかれまで、わが国の中国論議の虚妄な幻想性にいささかうんざりしながらも、繰返し強調してきたように、いわゆる文革派上海グループは丹頂鶴の丹頭のような存在でしがなく、彼らに対する憎悪や怨恨の念は、去る四月の天安門事件に明白に発露していたように、きわめて根深く、しかも広範に潜在してきた(拙稿「再構成・天安門事件」『中央公論』七六年九月号を参照されたい)。それだけに「四人組」の一網打尽という酷烈な代償において党主席の地位についた華国鋒へのナダレ現象的な支持の気運が当面は続くであらう。

しかし、やがて、この興奮がさめて行く時、公安部長・華国鋒にまつわる暗い影と権力中枢の「食うか食われるかの闘争」の結果としての華国鋒指導部にしかすぎないのではないかとこの懷疑が増幅してゆくであらうことは避けられない。

それだけに、華国鋒に関する新しい「神話」が作られねばならず、そのような「神話」作りは、一つには毛沢東みずから華国鋒を信頼しうる後継者として選任したのだというストーリーにおいて、二つには華国鋒はそのような信任に耐えうる指導者だというイメージ・アップによって、早くも開始されている。

去る一〇月三十一日の『人民日報』、『光明日報』など各紙が、一〇月二十九日付解

二の華国鋒



10月24日、天安門上で主席就任祝賀の「百万軍民」に手を振って答える華国鋒主席（WWP）

華国鋒とは

どんな人物か

では、華国鋒とはいったいどんな指導者なのであろうか。

ところが「どんな人物かわからない」のがこれまでの彼の特徴であって、彼が長く工作に従事してきた湖南省の方言では、華国鋒のことを「ニユール」というようである。「ニユール」というのはまさに「どんな人物かわからない者」を指すときのまったくの土語であって、もちろん字引にも出ていなければ、それに当てる文字もない。そのような土語なのである。

確かに、華国鋒は、いまや八億の民の領袖に一挙にのし上がったのだが、その経歴にはわからない部分が多い。出生地、生年でさえも諸説があつてさだかではない。

このようなナゾを秘めているところが、いかにも華国鋒らしいともいえようが、長く彼が党の地区委員会書記であつた毛沢東の故郷・湖南省湘潭地区では、華国鋒書記のことを「笑面虎（シアオ・ミンエン・フー）」と渾名していたともいふ。「笑面虎」とは、読んで字のごとく「表面はニコニコしていて、心が陰険な

人」という意味である。

なるほど、つい先日、「帝王」の靈前で「悲しみを力に変え」ることを誓ふ、「団結するのであつて分裂してはならない」と唱えたはずの人物が、その舌先もかわかぬうちにこのような準に出たのであるから、その個性はまさに「笑面虎」でなければならぬであらう。

ところで、周恩来死後の去る二月、華国鋒が國務院総理代行として登場し、四月初旬の天安門事件直後、彼が党第一副主席兼國務院総理になつてから、多くの報道は華国鋒が武骨な男でありながら農村出の土のにおいのする、いかにも人民中国のリーダーにふさわしい人物であるかのように描き始めた。今後、このようなイメージ作りがさらに進められるであらう。

だが、はたして華国鋒はそのように純朴な人物なのであろうか。次に華国鋒の来歴を可能な限り照らし出してみよう。

華国鋒の生年については、一九〇九年、一九一〇年、一九一一年、一九一二年、一九一七年など諸説がある。したがつて年齢も五九歳から六七歳まで幅があつてさだかではない。いずれにせよ、六〇歳前後とすれば、やはり年齢的には後継リーダーとして最もふさわしいといえよう。

出生地についても、山西省、江西省、

放軍報」編集部論文「華国鋒同志はわが党の恥ずかしくない領袖」をいっせいに転載し、「党の領袖にふさわしい高い品性、卓越した才能、革命的な大胆な戦略と英明な長期的視野」だとして華国鋒を最大級に称えていたのは、このような

「神話」作りが軍の主導下に始まつたことを示している。

こうしたなかで、かつて林彪がクロージ・アップされた時期に類似した状況を想起しているのは、ほかならぬ中国の民衆であらう。

湖南省などの三藩があるが、彼は山西ナマリ
の言葉を使つたという一部の報道にもか
かわらず、この点も確かではない。

なるほど、過般の毛沢東追悼式で弔辭
を朗読した際の彼の言葉を聞いてい
ると、ナマリがたいへん強いが、たとえそ
れが山西ナマリであっても、それだけで
山西省出身とはいえず、また外国賓客に
山西省出身だと語つたともいわれるが、
この点も確定的ではない。

内外の専門家筋では、湖南省出身、そ
れも毛沢東の故郷・湖南省湘潭県出身だ
との見方が強い。だとすると華国鋒は、
毛沢東が両親による「強制的な結婚」で
生活を共にしなかったとエドガー・スノ
ーに語つた、その最初の妻の親戚だとの
噂が中国内部で伝わっているとの有力な
情報とも一致するが、このへんの真偽い
かんは中国の政治風土においては、きわ
めて重要な意味を持つてであろう。

学歴は師範学校出で、一九三七年ごろ
社会主義青年団員から中国共産党に入党
した模様であり、ほぼ同時に延安根拠地



李先念

入りを果たして、一説には抗日軍政大学
に学んだともいう。

いずれにせよ、長征には加わっていな
いものの、延安には早くからはいつてい
たらしい。一九三九年、楊秀峰（当時、
北京大学教授、建国後、最高人民法院
長）に従つて山西省太行山地区に赴き、
抗日遊撃隊の宣伝工作に従事した模様で
ある。

この間、江西省で一時、抗日ゲリラに
加つたとの情報もあるが、こうして四
〇年代は主に山西省で工作に当たり、山
西省諸県（交城県ほか）の党委員会書記
を歴任したようだ。

一九四九年の中華人民共和国成立後
は、党の高級幹部・李雪鋒（当時、中共
中央中南局組織部長）に従つて党中央直
轄の地方ビュローの一つ「党中央中南
局（武漢）の組織部および統一戦線工作部
の処長となり、一九五二年には湖南省へ
移つて省党委員会統一戦線工作部副部長
となつた。五五年には毛沢東の故郷・湖
南省湘潭地区委員会書記になつてい



葉劍英

特務・公安畑歩ん

だ「毛王朝」正系

以来、華国鋒は、一九七一年九月の林
彪事件発生以後、事件の調査工作のため
に北京へ移るまで、二〇年近くの歳月を
毛沢東の故郷で過ごす。あの広大な中国
社会において、針の一点でしかないよう
な湘潭県で彼が工作してきたことが、今
日大きな意味を持つていたのは、い
うまでもなく、毛沢東との固有の關係に
根ざすであろうし、また同時に、その針
の一点を一貫して守つてきた人物であれ
ばこそ、華国鋒の今日があるのかもしれ
ない。

彼は、農業合作社運動が高まりつづあ
つた五五年一月、処女論文「農村各階
層の動態を十分に研究しよう」を当時の
中国共産党の準理論誌「学習」に発表し
ている。だが、この論文が示すように、
華国鋒の活動はあくまでも党専従者（ア



鄧小平

バラチキ）としての「農村工作」の分
野にあったのであり、彼自身が農民とし
て土にまみれていたのではけつてない
のである。

しかも、華国鋒はこの論文の最後を
「党の政策を貫徹し実現するためには、
まず党内で尖鋭、激烈な思想闘争を繰り
広げ、これらの誤つた思想を批判し、肅
清しなければならぬ」と述べているこ
とに示されるように、きわめて強硬な党
の路線の推進者であった。

そして、党委員会書記として党の組織
部や統一戦線工作部を歩んできたとい
うことは、彼が一貫して党官僚の地位にあ
つたばかりか、党の特務・公安關係の仕
事に従事してきたことを意味するのであ
る。

このことこそ、華国鋒が昨年一月の第
四期全国人民代表大会で公安部長に就任
し、今回の「四人組」追放では、中国共
産党の特務の重鎮で「毛沢東王朝」の警
護を担ってきた人民解放軍八三四一部隊
のリーダーであるとともに、要人の警護
と監視のための中央警衛処の責任者、江
東興を擁して、一挙に「予防クーデタ
ー」を断行した手並みの來源であつたと
いえよう。

彼はまた、早くも五五年当時から、劉
少奇系列にあつた党の湖南省委員会の反
対を押し切つて毛沢東の旧居を中心とす

FLYING TOWARD TOMORROW

フランス人アデルの考案した蒸気機関付飛行機。全長6.5m、主翼の幅14m、重さ296kg。1890年10月地上約20cmの高さを50m程飛ぶ。



明日への挑戦

大空は人間の挑戦の場だった。
 いろいろな知恵と工夫をこらし、
 彼らは大空へと舞い上がったものだ。
 挑戦者たちの心を想像しよう。
 その勇気と夢に思いをはせよう。
 私たちにも挑むべき明日がある。

明日を考える商社

ゲンゼ産業

東京都千代田区神田錦町3-17 ☎294-4141

る。毛沢東記念館」「革命事蹟陳列館」の修築につとめたり、毛沢東の出身村である韶山の水利建設工場に尽力したりして毛沢東に報いたともいわれている。

湖南省では副省長もつとめたが、五八年に開始された「大躍進」政策では、当時の湖南省党委員会第一書記でかつての毛沢東の秘書・周小舟と同じく湖南省出身で「大躍進」政策に真つ向から反対した彭徳懐・国防部長の側に立って毛沢東に叛いたとき、華国鋒は、断固として毛沢東擁護の先頭に立ったともいわれている。

やがて、全中国を揺さぶった文化大革命では、湖南省出身の劉少奇路線が湖南一帯でも根強いなかで、彼は勇躍、実権派打倒に立ち上がり、張平化・湖南省委第一書記、王延春・同第二書記ら湖南の実権派を追放する先兵となった。六七年夏、華北・中南・華東地区巡視の途中、

久々に湖南を訪れた毛沢東には親しく指示を受けている。

こうして六七年九月、湖南省革命委員会準備小組副組長となった華国鋒は、翌六八年四月に全国で最初の省レベルの革命委員会が成立した時にはその第二副主任となり、翌六九年四月の九大大会では「主席団」に選ばれると同時に党中央委員になったのである。七〇年一月、湖南省党委員会が再建されると、彼は党第一書記兼革命委员会主任に就任して、名実とも湖南のリーダーになっていたのである。

この間、注目すべきことは、やがて極左分子として批判された「徹底造反」の紅衛兵グループ「省無聯」（湖南省会無産階級革命派大連合委員会）から華国鋒が六八年一月に「地方の走資派」として批判されていることである。そして、おそらく華国鋒は、六八年一月二六日の長

沙における「省無聯」打倒の一〇万人大会を指導し、極左派鎮圧に重要な役割を演じたであろう。この経緯は、昨秋の「農業は大躍進に学ぶ全国農業会議」で「右」の鄧小平と「左」の江青が対立した時、バランスの立場から総括報告を行ないつつも決して「左」の立場に立たず、今回は「左」の「四人組」を一挙に切り落としたことも関連するのかもしれない。

こうした経過ののち、七一年九月の林彪事件に際しては、事件の調査工作に参加するため北京に招かれ、「林彪事件審査特別委員会」秘書長という重責を担ったのであった。七三年の夏の十大大会ではついに党中央政治局委員となり、昨年一月の全国人民代表大会では國務院副総理兼公安部長に抜擢された。

このような経歴を持つ華国鋒は、汪東興が江青夫人より以前から常に毛沢東の

身辺警護役として「黒子」のように毛沢東に寄り添ってきたのと同様、毛王朝のいわば正系であり、江青らこそ成り上がりの新参者であったかもしれず、このあたりにこそ、今回のドラマのカギがあるように思われる。

脱文革の潮流に どう対処するか

現時点で華国鋒体制の将来を展望することは容易ではない。しかし、私がこれまで考察してきた中国の政治の潮流と構造からすれば、今日の中国社会の底流に存在するのは、脱文化大革命からさらに反文化大革命の方向であって、この方向は非毛沢東化の潮流へと連らなっている。

華国鋒は、「右」と「左」のバランス

1として登場し、今回は「左」の「四人組」打倒の政治連合に乗ったのであるが、彼を支えている基盤は、人脈的には周恩来・鄧小平系統の実務派の党長老や軍幹部であり、李先念、葉劍英、劉伯承、陳錫聯、許世友、李德生らのリーダーたちであり、さらに國務院の政府指導者や科学院のインテリたちであろう。

華国鋒のような非上海グループ文革派を私はかねてから「新実権派」と呼んできたが、それらは汪東興、呉德、紀登奎の各政治委員らにすぎないであろう。

しかも、先の陳錫聯、許世友、李德生らの実力派軍人は、李先念・副総理とともに湖北省黄安県出身の「黄安グループ」を形成している。彼らは一九七四年一月の軍司令の大異動で一様に脚光を浴びた人びとであり、この軍の大異動が公表された翌日、鄧小平が党中央政治局常務委員に復権していることが明らかになったことに示されるように、これらはいずれも周恩来・鄧小平戦略の布石であったような気がする。

そして、反文化大革命の潮流は同時にいわゆる「走資派」路線の勝利に連なるわけであり、したがって、いわゆる「四つの現代化」（工業、農業、国防、科学技術の現代化）を中心とする中国の経済建設を本格的に志向すべき方向だといえよう。

まさに、このような方向において、すでに昨夏の杭州事件から今春の天安門事件、今夏の河北大地震を経て「毛沢東神話」の崩壊過程がすすみ、こうして毛沢東体制が解体しつつある。こうしたなかで、知識人、熟練労働者、テクノクラート、ビュロークラート、下放知識青年など新しく生成した社会集団は、いま幻の「階級闘争」と実りなき「継続革命」の時代から離脱しようとしていたのである。華国鋒指導部は、こうした中国社会の底流と妥協するか、さらにこうした底流を基盤とする指導者たちにやがて替わるるかしなければならぬであろう。

去る一〇月一〇日の『人民日報』『红旗』『解放軍報』の三紙共同社説以来、早くも「劉小奇、林彪」を非難する用語法が消滅し、さらに「批鄧」（鄧小平批判）の言葉もめっきり少なくなっている。「文化大革命」という言葉もはや強調されなくなった。このような変化のテンポに華国鋒指導部と彼自身を適応させてゆくことは容易ではなからう。

色めき立つ

ソ連、アメリカ

同時に華国鋒自身の弱点は、国際政治への経験の欠如であろう。「毛沢東一派

の解体にはしゃいでいるソ連は、将来、一、二年の時間的展望において、今日、マイナス点にある中ソ関係をゼロの地点にまで引き戻すだけでも戦略的な勝利につながるのと展望を持って、陰陽、硬軟、直接、間接の方法とチャネルによって対中接近を図るであろう。すでに、中ソ国境会議や河川交渉を「陽」の場として、ハノイを通ずるチャネルを「間接」的方法として、すでにモスクワは動き出している。

こうした時期に、奇しくもアメリカでは大統領選挙が行なわれた。カーター候補が現職のフォード大統領に勝って、民主主義的方法で最高指導者の交替を行なえることの貴さを、中国の悲劇と対象的にクローズ・アップさせたが、カーター新政権は、従来のフォード・キッシンジャー外交よりも、より慎重に対中政策、米台関係を考えるだろうというこれまでの予測に安んじていられない状況が出てきた。

いままでもなく、中ソ関係の改善の可能性が現実の課題として登場してきたからである。それだけに、華国鋒指導部をソ連の側へ歩み寄せせないためにも、アメリカは次の手を打たざるをえないが、こうした外からの働きかけが内政の不安定に拍車をかけて華国鋒指導部を揺さぶらないという保証はない。

Kaneman

日本橋・兜町

万証金引券

TEL 代表 (666) 1191・0561

最近の北京と台北との「秘密交渉」という衝撃的な情報の出所は、どうも、次の手を考えねばならないアメリカではないかとも思われるが、こうして北京の「宮廷革命」は、とめどもない波紋を描いて国際政治の将来にも大きな影響を与えるであろう。

ただし、それは「中国の影」の大きい、においてではなく、中国の実像が見えたいことによる米、ソ双方の新たな競合という方向においてであるが。

なかじま・みねお 一九三六年長野県松本市生まれ。東大大学院卒。現在、東京外国語大助教授。著書に「現代中国論」、「中国像の検証」など。